

「いつかはちゃんとお見合いするの？」

「おそらくはな。お前のように血筋に依らずとも龍脈を扱える才能を持つ者が生まれたのだから、私が子孫を残す必要もないのだからが……だがそうしたところで分家の誰かが峰津院を継ぐのだろう」

諦観でもなく、ただ事実を淡々と語っているようだった。

ヤマトがこの世界でも多くのものを背負ったままなのは世界をやり直す事を選んだ自分のせいもあると響希は考えていた。生まれもった定めは変えられなくとも、せめてプライベートな時間には、彼を心からいたわり支えてくれるような人と出会えればいいのと思う。

「迎えが来たようだ」

ヤマトの視線を追った先にジブスの黒い車が見えた。

「お前も乗っていけ。家まで送ろう」

「うん、ありがとう」

自宅まではそんなに遠くなかったがここで別れるのが名残惜しくて頷いた。

車が近づいてくるのを眺めながら響希はさつきから考えていた事を口にする。

「あのさ、俺に出来る事があったら何でも言つてよ。俺がいると調子がいいって言うなら、いつでも呼んでもらって構わないから」

ヤマトはジブスや龍脈そのものには一般人の響希を聞わらせたくないが、自分が一緒にいるだけでもなにかの助けになるというのなら力になりたい。

響希の言葉に当惑したのか束の間目を見開いたヤマトが、次の瞬間いつになく甘く笑んだ。と思った次の瞬間に目の前が暗くなる。ヤマトがぐっと近づいて視界が翳ったのだと気づいた時には彼の肩はしっかりと掴まれていた。

(なにこれ……え？ え？ ヤマト、何してるんだよ？) 唇の触れたところがやけにひんやりとして、逆に手足は熱い。脳が事態を理解する前に膝が抜けた。

「局長？ どうされました？」

車から降りてきた女性の慌てた声を聞きながら崩れおちた響希は、しかしヤマトに抱きとめられて地面に倒れこむのは避けられた。

「局長、そのご友人は……」

「先に彼を送っていく。早く車を」

「は、はい」

こちらを支えてくれる腕に凭れたまま、マコトが開けたドアから車に乗りこむ。身体には全く力が入らなくて声も上手く出せない気がした。

「今のは何？」

「出来る事なら何でもしてくれるのだろうか？」

冗談とも本気ともつかない声音に響希は戸惑う。そして、ヤマトの雰囲気は少し変わったようだと思いついた。

「ヤマト、もしかしてちょっと元気が変わった？」

「……まあ、な。お前の方は気分はどうだ？」

少し困ったように頷きながら、ヤマトは響希の身体を車のシートに預けさせた。

「さつきは何をしたんだ？　っていうか……もしかして何か吸った？　オトメさんの悪魔がやってみたいに」

思い浮かんだのは魔力を吸う吸魔の技だ。魔力ではないが自分達なら龍脈と共鳴する特殊なあの力を分け与える事も出来るのではないだろうか。

「吸ったというか……そうだな、お前に活力をもらったとでも言うておこうか」

響希の想像を裏付けるような言葉を返してヤマトがそっと笑む。シートに凭れて目を閉じ、ヤマトの言葉の意味について考えていたらあつという間に自宅へ着いていた。

「世話になったな」

「ううん、俺もヤマトが遊びに来てくれて楽しかったし」
車から降りたところで振り返り言った。そうか、とヤマトが呟いた。閉まりかけた窓に再び顔を近づけて、

「ヤマト、あの……ヤマトが身体、辛い時とか……さっきの、いつでもいいよ」

それだけ早口で言って離れた。

「お前こそ、あまり無理はするなよ」

そんなふうにはヤマトが返す。響希が何か言うより先に窓が閉まり、車は走り去っていった。

誰もいない自宅へ戻り、早々にベッドへ倒れこむ。まだ身体に力が入らず、心なしか息が切れるような感覚が続いていた。少し気怠くもある。

（だけど、こんな程度でヤマトの負担を軽くしてやれるなら）

目を閉じたまま、楽しかったこの一日を思い返した。新しい世界でもこの国を守る役目を背負ったままの響希の友達。ヤマトは自分自身で自らを取り巻く世界を変えてみせると決めているようだが、そんなふうに変化したからこそヤマトだけに重荷を押しつけてはいけないと響希は改めて思う。

それは正義感よりは彼への友情と、世界を造り変えたのが自分だという責任感からだ。多分今の響希にとってヤマトはただの友人というには特別すぎる存在になっただけで、だがその意味をはっきりと言葉にした事は互いにまだない。

再会した後度々会うようになったのはなりゆきだが、このままだ世間話をしてお互い大変だねと言い交わすだけの関係では自分達の距離は遠からず離れていくのだろ